

THE A MUSEUM

Vol.6-1 第16号 2011.6.30

Saitama Prefectural Museum of History and Folklore

企画展

あそび漫遊

平成23年

7月16日土 ▶ 8月31日水

主催：埼玉県立歴史と民俗の博物館

絵：国貞画「子供遊び」より（足立区立郷土博物館蔵）

子どもが楽しげに遊ぶ姿には心なごむものがあります。それは、いつの時代でも子どもの遊びをテーマにした絵画が多く描かれてきた理由の一つでもあるように感じられます。

この企画展では、江戸時代から昭和30年ごろまでの子どもの遊びの情景を多彩な絵や写真

で御覧いただくとともに、関連する考古資料や民俗資料を紹介いたしました。展示を通じて、さまざまな時代の子どもの遊ぶ姿を楽しみながら、それぞれに子ども時代を思い出したり、子どもの文化としての「遊び」について考えてみる機会としていただければ幸いです。

あそび漫遊

プロローグ 「遊び」の起源

「遊び」という語は、現存する書物の上では『古事記』の中に、神代の^{とむら}甲いの場で行われた歌舞をさす言葉として初めて登場します。このことから、遊びは元来は神事としての芸能を意味しており、祭りに行く歌舞を「神遊び」と呼ぶのは、そうした遊びの古い意味を受け継いだものと考えられています。

遊びは、『古事記』ではほかに漁や狩猟、『万葉集』では行楽^{うたげ}や宴、『源氏物語』をはじめとする平安時代の文学の中では管絃^{かんげん}や詩歌・舞などを楽しむことを意味する言葉として使われています。このように時代によって内容は異なりますが、心楽しく時を過ごすことを一般的に「遊び」と呼ぶようになっていったものと思われます。

さらに中世になると子どもの娯楽としての遊びが絵画の中に描かれるようになり、各地の中世遺跡からは独楽・毬杖・羽子板・木トンボなど木製の玩具が出土しています。

I 江戸時代の玩具

江戸時代の子どもの間では、古代や中世から行われてきた遊びがさらに広まっていきます。加えて、陶磁製や土製の人形、飯事道具、泥面子^{ままごと}などといった玩具も登場し、子どもの遊びは一層多彩

なものになっていきます。こうした玩具は、各地の武士や豪商の屋敷跡や墓などからの出土品の中にも見ることができます。埼玉県内では川越市内の遺跡から、多数の玩具が出土しています。

中でも人形は信仰と結びついたものが多く、犬は子どもの守り神、天神は学業成就や習字の上達^{さいぎょう}、西行は泥棒除けや腰痛除けといったように、さまざまな意味が込められていました。また、赤く塗られた人形には疱瘡除け、鳥の土笛には虫封じや食べ物^{ほうそう}がのどに詰まらないようにとの意味があったといわれています。

II 遊びの情景

江戸時代中期には木版多色刷りの錦絵が登場し、広く愛好されるようになります。多岐にわたるその題材の一つに「子供絵」と呼ばれるものがあり、子どもの遊ぶ姿を描いた作品が多く残されています。また、明治維新のころには子どもの遊びに擬して世相を風刺した絵も多く描かれました。

明治後期になると、新しい多色刷りの技術である石版印刷が登場します。この技術によって作られたものに、引札^{ひきふだ}があります。引札は江戸時代から昭和初期にかけて商店が配布した一種の広告で、さまざまな絵柄のものが作られましたが、中には子どもの遊ぶ姿を描いたものも見られます。



古代の遊びの図（『骨董集』より）
当館 蔵



国貞画「子供遊び」
足立区立郷土博物館 蔵

あそび漫遊

このほか、このコーナーでは子どもの遊びを描いた江戸時代の風俗図屏風や明治時代の絵馬、昭和10年代の子どもの生活を描いた渡邊武夫画「戦時生活絵暦」を展示します。

Ⅲ 埼玉の子どもの遊び

昭和20年代から30年代の初めにかけて埼玉新聞社によって撮影された数多くの写真が、「戦後報道写真」として県立文書館に保存されています。これらの写真は当時の埼玉の様子を記録した貴重な資料であり、その中には子どもが遊ぶ姿を生き生きととらえたものも数多くあります。

このころの子どもの遊びは、野外の自然の中で遊ぶ「外遊び」が主流でした。子どもたちは草花を摘んで花輪を作ったり、魚や虫を捕ったり、田んぼの稲藁で遊んだり、手作りの玩具で遊んだり



引札 (雪と子供) 当館 蔵



わたなべたけ お せんじ せいかつ えごよみ
渡邊武夫画「戦時生活絵暦」より
埼玉県立近代美術館 蔵

と、四季の移ろいを肌で感じながら自然の中で遊んでいたことが写真からうかがえます。

また、各地域では花祭り、七夕、十五夜、十日や夜など子どもが参加する歳事が行われており、子どもたちの楽しみになっていました。

エピローグ 子どもは遊びの天才

平成の子どもの遊びといえば、テレビゲームやネットゲームなどコンピュータを使ったものや、テレビ番組のキャラクターを使った玩具などを連想しがちです。このように、今日の子どもの遊びは商品化され、流行に大きく影響されているかのように見えます。しかし、「子どもは遊びの天才」と言われるように、子どもたちは何もないところからでも工夫して遊びを見つけていく力を本能的に持っているように思われます。

麻生豊画「銀座復興絵巻」は、太平洋戦争で焼け野原になった銀座が次第に復興していく様子を年を追って描いたものです。昭和21年の第2巻には、戦災でスクラップになった自動車を遊び場にする子どもの姿が描かれていますが、この場面は子どもが持っている、いつでもたくましく遊ぶ力を表現しているように感じます。そして、こうした子どもたちの遊ぶ力は、文化を創造し発展させていく力につながっているのではないのでしょうか。

(特別展示担当 大明 敦)



あそゆたか ざんざふっこう えまき
麻生豊画「銀座復興絵巻」昭和21年第2巻(部分)
当館 蔵

開館 40 周年の時を迎えて

「待望久しかった県立博物館が、武蔵野の面影を残す大宮公園の一角に堂々とその姿を池に投ずるのを見ると、また感無量なものがある。」という文章は、「埼玉県立博物館ニュース」創刊号の書き出しです。

昭和34年12月、「埼玉県立博物館の設置について」の請願が県議会において採択され、昭和46年11月に埼玉県立博物館は開館した。請願から開館までの12年余りを鑑みると、まさに待望久しかったという言葉の通りだと想います。

昭和47年には「太平記絵巻（第一巻）」を購入、その後も昭和58年に国宝「太刀（銘備前国長船住左兵衛尉景光・景政）」、平成5年に国宝「短刀（銘備州長船住景光）」、そして平成7年の「太平記絵巻（第七巻）」の購入を皮きりに、平成8年に第二巻、平成13年に第十巻、平成14年に第六巻というように、太平記絵巻の購入を継続し、資料の充実に努めてまいりました。



博物館ニュース創刊号

昭和57年には、県立博物館の近代美術部門が県立近代美術館として独立、昭和58年には、県立博物館も初の展示全面改装を行い、歴史系総合

博物館へと生まれ変わりました。

そして、平成18年度には県立博物館施設の再編整備により、旧県立博物館と旧県立民俗文化センターを統合して県立歴史と民俗の博物館として新装開館をしました。平成19年には新体験学習施設の「ゆめ・体験ひろば」がオープンしています。

ここに歴史、民俗、古美術の分野に関して広域的、総合的、多角的に扱う人文系総合博物館として新たに生まれ変わったのです。



県立歴史と民俗の博物館だより第1号

平成23年は東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）による戦後日本最大の試練の年となりました。このたびの地震は貞観地震（869年）との類似点が指摘されています。その貞観時代には、新たな芸能の動きが生まれてきたといわれています。また食の文化や仏像も大きく変わったといわれています。

開館40周年の今年を新たな時代へのスタートの年としなければならないと思います。県民の期待にこたえられるよう博物館の使命を果たしてまいります。（館長 矢部保雄）

「歴史災害と博物館」

2011年4月20日の朝日新聞に、東日本大震災による大津波は「明治三陸津波」と「貞観津波」の双方のメカニズムを持つ・・・という記事が載っていました。東日本大震災と比較された、貞観津波とはいったいどのような津波だったのでしょうか。

『日本三代実録』を開くと、貞観十一年（869）五月の項に「廿六日癸未。陸奥国地大震動」に始まり「～或地裂～海口哮吼～去海數十百里～」と続く記述があります。ここには、城郭や倉庫の倒壊や、津波で多くの溺死者があったことなどが淡々と書かれています。この時代の城郭とは、胆沢城や新田柵などの陸奥国を中心に設置された古代城柵で、ここで記されたのは、陸奥国府でもある多賀城を指していると考えられます。現在の宮城県多賀城市です。行政拠点であり軍事施設でもある多賀城の倉庫や城壁・門櫓などが倒壊し、海岸から数km離れている国府域でも溺死者が出ています。

貞観という時代は859年～877年の間ですが、この期間地震や津波だけではなく、洪水・旱魃・飢饉など毎年のように災害に見舞われています。富士山・阿蘇山・鳥海山などの噴火や疫病の流行も見られ、さらに貞観地震の9年後の元慶二年（878）には、「九月廿九日辛酉。夜。地震。是日。関東諸国地大震裂。相模武蔵特為尤甚。其後五六日。震動未止。公私屋舎一無全者。～」と記された、神奈川・東京・埼玉を中心とする巨大な地震が発生しています。津波に関する記述はありませんが、内容からは貞観十一年の地震よりも大きな震度であったことが感じられます。

このような文献資料に見られる災害記録は、噴砂・亀裂のように土地に残された痕跡として、考古学的にも確認することができます。また、噴砂などが住居跡のような遺構と接触していれば、出土する土器の年代から、発生した時代を特定することも可能です。これまで県内の発掘調査では、弘仁九年（818）の地震や元慶二年の大地震の亀裂・噴砂が確認されており、新しい時代では1931年の西埼玉地震の噴砂も発見されています。液状化現象や噴砂が発生する地震は、気象庁震度5以上とされています。

西暦869年5月26日、東北地方太平洋沖の深さ15km～50kmのプレート境界部が大きくずれたことで発生した巨大地震。これが陸奥国府を襲った貞観津波の原因です。

貞観期の災害の多発は、古代社会にも大きな影響を与え、火山噴火による降灰や津波・洪水による農地の冠水は、災害の後遺症として継続的にその後の飢饉や疫病の発生を招きました。俘囚の乱・群盗の多発・略奪の横行など、社会が大きく混乱する時代です。このような災害や環境変化による社会の混乱は、日本だけではなく世界各地で共通の歴史事象として見るができます。例えば、中国唐末の黄巢の乱や元末の紅巾の乱は、災害や蝗禍が引き金となった凶作・飢饉が原因の一つで、唐や元の滅亡に関わっています。また、中世ヨーロッパのペスト禍は、農村の荒廃・労働力不足を招き、農民反乱や百年戦争を経て、封建領主の没落・中央集権国家への脱皮といった、歴史の転換期の要因になっています。

西暦869年貞観地震が発生し、東北地方を中心に大きな被害をもたらしました。しかし、東日本大震災は、原発という人間が造り出した装置をコントロールできなかったことで、自然災害とテクノロジー災害の複合災害となってしまいました。これまで人間が遭遇したことのない新たなカタストロフィーです。災害・ハザードは社会の本質や回復力を明るみに出します。現代社会はどのような本質を見せ、どの程度回復力を示すことができるのでしょうか。

博物館あるいは学芸員は、それぞれの専門分野の視点で災害やその影響を展示で表現したり、記録として残すことができます。これまでも、歴史災害をテーマとした企画展が各地で開催されています。東日本大震災も、我々が貞観地震を語るように歴史災害として語られる日が来るでしょう。しかし、災害を風化させず文化的な側面だけではなく、社会史的なハザードマップになるような展示を試みるなど、文化財レスキュー以外にも、博物館が果たせる役割は少なくありません。

（主席学芸主幹 井上尚明）